

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

25

ヨウラクの咲いている姿を見たくて、一度だけ住田町上有住の松山口から入ったが、黒岩近くからドシャぶり。「この調子だと帰りの下りが心配」という案内の方の忠告に従い、涙をのんだ。

人間の立ち入りを拒絶する千古の森より、人とかかわりを持ちながらそこにあるべき生態を失わず、健気に付き合ってくれるような森に私は親しみを覚える。

共生とはお互い一緒に

共生とはお互い一緒に

ヨウラク（櫻珞）はインドの貴族が身につけた装身具で、佛像の天蓋や装飾に用いられた。気品のある学名をもらったヨウラクツツジは花冠が鐘型で、先が四裂の紅紫色萼。

花。「固有種だ！」と興奮していた菊地政雄さんの顔が浮かぶ。ゴヨウザン

その想いを聴きとれる感性と知性は地域に生きる意味を問うことと同じ

で、常に磨いてゆくべき筋合いのもの。山折西雄さんは「共生と共死は一体のもの、共死まで踏み込まない共生はいかがわしい」と言っている。

私は白神山地の世界遺産登録時に得難い経験をする。

い話が聞こえてくる。しかし、地域資源の護り手としての住民は、部外者にも共生の心を懐き含いつつ、きつと解決してゆくに違いない。

それは避けて通れない
壮大な実験だと考える。
五葉山が死ぬときは樺野
の集落だけでなく、海も
川も死ぬ、そういう想い
こそ大切な「土着の心」。

みんなはまた叫びました。
「少し木貰ってもいいかあ」
「ようし」森は一斉にこたへました。
森に伺いを立てる謙虚さはどうだろう。この半世紀だけでも、この山をめぐって土着の心を磨く機会が沢山あった。
畜産開発や大規模伐採

高いものに磨かれてゆく。五葉山を土着の象徴と仰ぐ地域の人達が羨ましくてならない。

【執筆者プロフィール】一九二六年、山田町船越生まれ。岩手大学教授、同農学部長、学長を歴任し、九七年に退官。日本林学会副会長、岩手県森林審議会、東北森林管理局管理審議会などの会長のほか、岩手県文化振興事業団理事長、岩手県教育委員長などを務めた。現・岩手大学名誉教授。

羨ましい土着の象徴

岩手大学名誉教授

船越昭治

した。核心地域のコアの部分に入山を認めるか否かで激論を斗わせ、秋田県側は禁止、青森県側はマタギ道十数本に限って入山を認める、という方針をとり決めた。

「山に入るなど言われて一番悲しむのは山っこだべ。顔っこ見せねば寂しがるべ。そんな人でなし」したら死んだ爺さまにおごられる」

その言葉を聞いて私は

私は種山ヶ原に森林博物館をつくるという企画に参加したとき、真っ先に頭に浮かんだのは宮沢賢治だった。賢治の作品群に種山は美によく出てくる。

す、一緒に生きている
森にまつまれて今があ
の心」を育む

画果て対応に違ひが出たのは、地域住民の暮らしたの結びつき方にあった。奥地集落の崩壊、山

『狼森と笊森、盜森』
に、四人の男と森との会
話がある。

言に耳をすま
りたいから。森
想いが「土着

稼ぎの後退は同じように進んだが、青森側ではマタギ、山の幸採取から山落書きした、など頭の痛

「いいぞう」森が一斉にこたへました。

森の声
を感じ
への想

